この人に聞く　佐竹直子さん

蔵王のもりこども園 園長を訪ねて

蔵王のもりこども園　園長を訪ねて
海外青年協力隊（フィリピン）の経験
中越地震避難所での若いお母さんたちの困り感を集め、避難所運営を子育ての視点から提案
子育てママ支援の拠点　にな・ニーナ前代表

◆プロフィール
・新町みんな食堂世話人代表
・蔵王の杜プレイパーク共同代表
・チーム中越代表理事
・市民協働ネットワーク長岡理事
・小学校評議員・県社会教育委員
・長岡市立北中学校コミュニティスクールディレクター
他

編　集　部

長年、人格形成の基礎になる乳幼児期教育に携わる。子育てに自己責任論が持ち込まれていて、さらにコロナ禍で格差が一層広がり影響を受けている今、地域の力を生かしながら子どもと親に向き合い育ちを支えている。

２００４年新潟県中越地震の時は、子育て中だった家族の声を聞きまとめ、避難所経営、防災計画の中に子育ての視点を組み入れた。震災後は「にな・ニーナ」を立ち上げお母さん達と一緒に子育て支援を続けていた。

子どもの育ちを保障できる環境

蔵王のもりこども園は、長岡市の北部の市民から蔵王様と親しまれている蔵王神社境内の細い道1本を隔てたところにあります。

園舎と産後ディケアる～むままナビの建物がありました。

○歴史が長い園を受け継いだそうですね。

蔵王保育園は昭和40年にスタート。私は以前、保育士として働いていたのですが、平成28年から園長になりました。平成29年産後ディケアる～むままナビを実施。平成31年幼保連携型認定こども園に移行して蔵王

のもりこども園と改称、新しく園舎を竣工しました。
園舎を新しくするにあたり、職員へどんな保育がしたいのか、その環境で子どもはどのように動くのかイメージしあったりしてワークショップをしアイデアを出し合い、それをもとに長岡造形大学の先生からで設計してもらいました。
玄関ホールから続く床、壁素材、階段、手すりがどれも柔らかな木材でできていて、素足の感触が気持ちいい。皮膚感覚を育てたいのです。採光条件はよく、少し明るすぎるくらいです。
園が大切にしている一つが食事です。そこで給食調理室を子どもが見れるようにガラス張りにして、調理員さんが作業しているところを近くで見れるようにしました。子どもたちは飽きずにずっと見ています。最近、食事を作る大人の姿を見る機会が減ってきているので働く姿を見せるのは大切なことだはないでしょうか。
子どもが必要な情報をキャッチできるように壁には装飾がなく、季節の木の枝を下げておきます。装飾は創作するのに先生たちの手間がかかるので、そこには労力を使わないで子どもと向き合うことに力を注ぎましょうと先生方に伝えています。

○健康な体で、恵まれた自然の中で のびのびと過ごしていますね

園庭には大きな砂場とどろんこ遊びのスペース（今はブルーシートで覆われている）があります。子どもたちはどろんこ遊びが大好きで、職員も一緒に「これでもか！」というくらい遊び込むので、外を通っている近所の方がびっくりするくらいです。大きな欅が1本茂っていているのですが、知り合いが「欅を中心にしてツリーハウスを作ってやるよ」と言って下さり、まるで秘密基地のようなものができました。隣の蔵王神社の境内を散歩して四季を感じています。派手なアスレチックなどの遊具類はなくても、十分のびのびと子どもの五感を育てるとことができます。
5歳児教室の椅子は背もたれがありません。「子どもの背中がぐにゃぐにゃしていて、座る時、背もたれに寄りかかりふんぞり返っている。身体を支えられないから股を大きく開いている。こういう子が増えてきている」という先生たちの気づきから、椅子の背もたれをなくしました。だんだんしっかりと座れるようになってきて、4歳児教室でも取り入れることができる

か検討しています。

この園の大きな特徴は、地域の人がお伝いに寄ってきてくれることです。行事食作りや花壇仕事、畑、読みきかせなどに地域のおじいちゃんおばあちゃんが来る。あてにされることでその方たちが元気になる、地域が元気になり、園が地域の拠り所になっていく、子どもが育つという循環を起こしています。

これはコミュニティスクール構想にもつながります。地域の北中学校区にはコミュニティスクール（CS）構想があり、私は地域と学校をつなぐCSディレクターをしています。

中学校は地域のものなので、地域の人に大事にしてもらえるような学校にする。もし学校の中で解決できないことがあれば地域の力を借りて解決する。地域の中で解決できないことは、中学校で生徒が住民の一人となって考え地域に提案していく。地域も生徒も共に育っていきます。

○「ままナビ」はどのような事をしているのでしょうか

長岡市から委託を受けて妊娠中から産後にかけてのママをナビゲートします。以前支援センターをしていましたが、支援センターにも来れない人がいるということが分かってきました。

私たちがこれまで当たり前で何も考えずにやってきたこと、たとえば抱っこのしかた、おんぶの仕方、離乳食のスプーンを口に入れる角度と深さ。えっ？と思うことに悩んでいるパパママが結構います。それは職種とか学歴とか関係ありません。「初めておんぶしました」と言って帰る人がいます。パパママはマニュアルと違うことにとても不安を持ち真剣に悩んでいます。でもこれは真面目に子育てをしようとしている姿なのです。

○平成4年から3年間海外青年協力隊でフィリピンに行かれたそうですがどのようなことをしていたですか

当時フィリピンでは小学校教諭は国家資格でしたが、幼児教育や保育の扱いはあいまいで、子育て経過があればよいだろうという具合でした。重要な仕事をしているにもかかわらず社会的な地位はなく、賃金は低くボランティアのようなものでした。そこで先生を養成して、誇りをもって仕事ができるようなプログラムを国から作っ

てもらうというのが目標でしたので、日本で言うと厚生労働省レベルのところに配属してもらいました。

その国にはその国の文化、習慣があるので日本流を持ち込むのは間違いですし、無理やり取り入れても長続きしない。技術的なことは教えられますが、根っこのところはその国の人たちが築いていかなければなりません。ちょうど現地に視察にライオンズクラブが来たので協力してもらって建物を作り、初めての養成学校を作りました。今そこは保母さんたちの研修センターにになっています。

○日本に戻ってからは保育園に戻ったのですか

日本に帰って来て、保育園に戻る方法がありましたが、一つの駒に戻らなくてもいいのではないかと思え、保育現場から距離をおき子育てを見てみようと思いました。

子育てにさまざまな社会的資源があります。保育所や保健婦さん、問題別の相談機関、NPO、NGO、行政はサービスの情報を持っています。でもバラバラになっているので子育てをしているので困りごとがあったら適切なところに引き継いであげる。ハブのようになってつないであげようと考え「三尺花ネット」を作りました。

平成16年中越地震発生。長岡周辺では避難所がたくさん開設されました。ここで過ごした子どもと子育て中のママたちはどのように過ごしたのか調査してみたら、胸がつぶれそうな結果がわかりました。「うるさい、騒いでるな、走るな」等、厳しい言葉と冷たい視線が投げられて、「苦しかった。避難所にはもういられなくなった」という声がたくさんだったのです。

これまでやってきた子育てに関心のある人だけ、問題のある人だけでネットワークを作っていくのでは駄目で、いろいろな人が普段から繋がっていくことが大事だと考えました。いろんな人が集まれる多世代交流会「にな・ニーナ」を始めました。

キーワードは「食」。食は世代を超えて共通のものです。転勤族のママたちが多かったのでせっかく長岡で子育てするのなら長岡野菜の料理や、煮菜やのっぺや団子など郷土食を覚えたいというニーズがありました。

「作る・食べる」は予想以上時広がりを生んでいきました。畑を貸せてくれる人や何も知らない私たちに畑作業を教えてくれる人が出てきました。普段の惣菜料理なら教えてあげられる、団子つくりなら任せてく

れというおばあちゃんもいました。今まで続けてきた得意なことを伝えるのですから、支援してくれる人も幸せな気分になり、輪は広がっていきました。

ママさんたちは料理を通して教えあったり、子どもが泣いていると「いいよ私があやしているから、それしていていいよ」と声をかける。助けてもらって嬉しいのは勿論ですが、世話をした側も「よその子を世話した。人の役に立てた」ということがすごく嬉しく自信になっていくのです。

△△は得意、○○ならできるというように、今までやっていたことや得意分野で人を喜ばせることができます。今子育てに自信のないお母さんがいたとしても、たまたま今は子育てがうまくいかないだけであって、その前にやっていたことがあったわけです。その力を負担にならない程度に少し出すと、自分はお世話されるだけの人ではないことに気が付いていきます。誰もが支援される側であり支援する側なのです。お母さんが本来持っているものを生かしていきたいと思います。「伸びたい」「できる」という願いを持っているからです。サービスをやりすぎるとお母さんの力を奪ってしまいます。

○新しいものに向かっていく　バイタリティはどこから

「生きる力をはぐくむ」とよく言いますが「生きる力」これは「受援力・助けてもらう力」だと思います。私たちは誰かと関わらないと生きていけません。自分で何でもできるわけがないので、助けてもらう力が大切だと思います。「三尺玉」も「にな・ニーナ」も「こども園」も大勢の人から助けてもらって運営してきました。

ピンチはチャンスです。変わるチャンス。問題が起きたときは苦しいですが、ここで逃げてもまた同じ問題がやってきます。社会との接点を欠かせないようにしてやっていきたいです。

「子ども心・遊び心ある大人集まれ」と蔵王様の敷地を借りて夏場に山羊の飼育を始めました。かわいいです。第3金曜日大人が集まってワイワイ言いながら世話するのです。

大人が生き生きしていると地域が元気になり、子ども元気に育ちます。園の子どもたちも山羊は大好きです。山羊を見に来てください。

（文責・田口）